

【論文】

William Shakespeare 作 *Othello* における
Iago の動機と感情の模倣

利根 有紀

0. はじめに

通常、演劇を楽しむ観客は、登場人物達の言葉や行動の背後に、それを引き起こす感情が存在すると考える。しかし Shakespeare は *Othello* において、このような観客の期待を裏切っている。主人公である Othello を嫉妬に狂わせ、妻 Desdemona の殺害にまで追い込む悪党 Iago が、なぜそのような悪事を働くのか、その動機を明確にせず、彼の行動の背後にあるはずの感情の流れを観客が推測することを拒んでいる。

第一幕の Roderigo との会話 (‘I do hate the Moor’ (1.3.385); ‘I hate the Moor’ (1.3.366-7)) や独白 (‘I hate the Moor’ (1.3.385)) において、Shakespeare は Iago に「Othello を憎んでいる」と繰り返し主張させている。¹このような言葉の繰り返しは、Iago の Othello に対する憎しみを観客に印象づけるのに役立つと考えられる。しかしその一方で、Iago の言葉は、何故彼が Othello を嫌うのか、その理由を納得できる形で説明していないと考える批評家は珍しくない。そのような批評家たちは、Iago が口にする動機 (Cassio の副官昇進に対する憤り、妻 Emilia が Othello と Cassio を相手に不貞を犯したと思われることに対する嫉妬心、Othello の妻 Desdemona への恋情) はすべて信ぴょう性を欠いていると考えている。例えば、Emilia が不貞を犯したと疑う Iago について、Elmer Edgar Stoll は「Othello は Emilia にまったく興味を持っていないし、彼はそのような罪を犯す人物でもない」と断言している。(238) 同様に W. H. Auden は、Iago の Desdemona への横恋慕について、「劇中で Iago が Desdemona を誘惑しようと試みることはない。」と指摘している。(249) このような先行研究の指摘をみると、一幕三場の Iago の説明的な独白について言った、「動機なき悪事の動機探し」という Samuel Taylor Coleridge の有名な言葉は、Iago の動機付けの不可解さを端的に言い表していると言えるだろう。(Hawkes 171)

Shakespeare の *Othello* は Giraldi Cinthio 作 *Gli Hecatommithi* を主な材源としているが、この材源では Shakespeare の Iago に当たる人物である旗手に、Desdemona (Shakespeare の *Othello* では Desdemona) へのかなわぬ愛という明確な動機が与えられている。つまり Shakespeare は、*Gli Hecatommithi* のストーリーの大部分をそのまま採用しながらも、旗手

の明確な動機付けを Iago の不可解な動機 (あるいは無動機) へと、あえてつくり変えるということをしている。また、最終幕の Othello の「私の心と身体を何故畏にかけたのか」と Iago に尋ねるせりふは、Othello だけでなく観客の疑問も反映していると考えられるが、Shakespeare は Iago に、「俺に何も聞くな。お前がわかっていることがわかっていることだ。これから俺は何も話さないぞ。」と答えさせることで、Othello だけでなく、Iago の動機を知りたいという観客の期待をも裏切り、Iago の動機の不可解さを強く印象づけている。

そもそも先行研究において、Iago の動機をめぐる解釈には大きく二つの方向性がある。一つは、Iago の悪事には合理的な動機があるとする考え方である。Iago が自ら主張する動機をそのまま彼の悪事の動機として受け取るべきだと主張する、あるいは、直接的な言及はないものの Iago の行動の裏に潜在的に存在する動機をテキストから読み取ろうとする研究がここに含まれる。Iago の動機をめぐるもう一つの解釈は、Iago が口にする動機を感情の裏付けがないと考えて否定し、Iago は悪魔そのものであり、Iago の悪事には合理的な理由などないとする考え方である。しかし後者の中にも、後で紹介する Bernard Spivack や Michael E. Mooney のように、Iago の行動は合理的に説明できない悪への衝動という寓意性と、悪事の理由を自ら説明しようと言葉をつくす人間性の両方を伴うと考える研究者も多い。

Iago の動機付けの不可解さはいまだ決定的な解釈が存在しない *Othello* 最大の謎であり、同時にこの作品の魅力の一つでもある。言い換えると、Iago の動機をめぐる謎を議論することはすなわち、劇作品としての *Othello* の秀逸さの秘密を探ることでもある。国内外の上演史は、演出家や俳優が Iago の動機をどのように解釈するかによって、上演された作品全体の印象がまったく異なることを明らかにしている。また、先行する作品研究においても、Iago の動機についての解釈が作品全体の解釈に多大な影響を与えていることがわかる。

本稿では Iago の動機をめぐる解釈に、Iago による「感情の模倣」という新たな視点を加えることを試みたい。これは A. D. Nuttall の解釈にヒントを得たものである。Nuttall は Iago の動機をめぐる議論において、「Iago は本当でない話を本当のように扱い、その結果自身の激しい感情を引き起こすことに成功しているが、そのような感情はフィクションにすぎない」と断じている。(282) この Nuttall の解釈を踏まえ、私はさらに次のように主張したい。Iago の感情は他の登場人物達の感情を鏡のように映し出し、模倣したものであり、さらにメタシアター的に言えば、この劇を観る観客の感情も映し出している。

他人の感情を模倣した感情は真に自分の感情ではないゆえに実体を持たない感情であるともいえるが、偽りの感情ではあってもその存在を否定することはできない。先に述べたように、Iago の悪事の動機を感情の裏付けがないと考えて否定する研究者の多くは、中世

道徳劇の Vice の伝統という視点から Iago の動機 (無動機) を論じることが多かった。Iago は確かに道徳劇の Vice の伝統を受け継いでいる。しかし、彼の悪事の動機に限って言えば、「存在そのものが悪であるため理由なく悪を行う」という Vice 的な寓意性だけではとらえきれない側面がある。そのことを明らかにするために、まずは Iago と道徳劇の Vice の類似点と相違点についてみておきたい。

1. 悪を体現する Vice の伝統と Iago

Iago は、しばしば、中世道徳劇に登場する寓意的なキャラクター、Vice と重ね合わせて論じられる。道徳劇の Vice は悪徳を体現し、人間を欺き、観客に親しく話しかけ、彼の悪事の被害者を嘲笑する。このような行動は、Iago にも顕著に見られるものである。さらに Vice は、独白や傍白を通じて彼の悪事の計画を観客に伝えるという特徴もあるが、Iago も同じようにふるまう姿が見られる。

LAGO. Cassio's a proper man: let me see now,
To get his place, and to plume up my will
In double knavery. How? How? let's see:
After some time to abuse Othello's ear
That he is too familiar with his wife.
He hath a person and a smooth dispose
To be suspected, framed to make woman false.
The Moor is of a free and open nature
That thinks men honest that but seem to be so,
And will as tenderly be led by th' nose
As asses are.

(1.3.391-401)

Iago は、この独白で観客に打ち明けた通りに彼の邪悪な計画を実行に移し、Cassio から Othello の副官という地位を奪うことに成功する。Iago はまた、最終幕で彼の悪事が公になった後にも不遜な態度を崩さず、その姿も道徳劇の Vice を彷彿とさせる。

このように Iago には、Vice の典型的な特徴がいくつも見られるが、Iago というキャラクターを Vice の特徴を受け継ぐ悪党という観点から考える批評家たちは、彼の動機のあいまいさこそ、彼が Vice から受け継いだ最も注目すべき特徴であると考えている。Iago が悪事を行

う動機を自ら説明する独白は、「言葉としての存在感」はあるが、「より深い部分でのあいまいさが、Iago が口にする動機をひとつひとつ無効にし、それらすべてを劇中の彼の個性と行動からかけ離れたものにしてている」(7) という Bernard Spivack の指摘は、多くの批評家の印象を代表するものであろう。Spivack はこれを、Shakespeare が Iago を、道徳劇の Vice が持つ寓意性と Vice にはない心理性を併せ持つキャラクターとして造形したゆえであると論じている。Spivack の考えでは、Othello と Cassio に対する Iago の悪意は、心理的な説明を持たず、また適切な感情も伴わない、道徳劇の Vice が体現するような善なる存在への「寓意的な」憎しみである。同じように考える批評家は珍しくない。例えば Elmer Edgar Stoll は、「表面的な人間性の下で、Iago は悪魔以外の何物でもない」と指摘し、「不十分な動機を集積や、彼の疑惑の不確かさと根拠の薄弱さは、Iago の目的が悪魔的であることを示している」と主張している。(232、234)

Iago は心理性と寓意性を併せ持つキャラクターであると考える Spivack にとって、次に引用する Iago の言葉は、彼の二面性を端的に表すものである。

… I hate the Moor;
And it is thought abroad that 'twixt my sheets
He's done my office.
 (1.3.385-7, italics mine)

Spivack によれば、この 'And' は、「寓意の劇と自然の劇の継ぎ目である」。(448) Spivack 同様、Iago が心理的なキャラクターでありながら伝統的な道徳劇に登場する Vice 的キャラクターでもあると考える Michael E. Mooney は、Iago の Vice としての人格は、観客に彼の視点を共有しながら彼の悪事を楽しむことを促し、一方で Iago の心理的人格は、「彼を観客から引き離し、彼の動機を検証させる」と指摘している。(118-119)² さらに Mooney は、「Iago が開幕の独白で挙げる Othello を嫌う理由は正当なものと思えるが、2 幕 3 場の独白のすぐ後には、Cassio から副官の地位を奪うという目的が達成されつつあるにもかかわらず、Iago は今や悪そのもののために悪を行い、そのことは Iago の非人間的な Vice の人格を反映している」とも主張している。(119)

私は、Shakespeare が Vice の伝統を受け継ぐキャラクターとして Iago を造形しながら Vice にはない心理性も与えているという考えには同意する。しかし悪事を行う Iago が、Vice 的な善きものへの憎しみや悪そのものを楽しむ気持ち以外の動機をもたないという意見には賛成できない。なぜなら Iago の内面には、善に対する Vice 的な憎しみや悪そのもの

を楽しむ気持ちだけでは説明しきれない、不可解な「空虚さ」が存在しているからである。

実際先行研究において、Iago が抱える「空虚さ」に注目し、それを Iago のキャラクター造形の最も重要な特徴と論じているものが珍しくない。例えば Barbara Everett は、Iago を、「空虚な目をしており、内面を完全に欠いた人物がゆえに、(表面上は) 比類なき活力のかたまり」であると指摘している。(192) またすでに紹介したように、A. D. Nuttall は、「Iago が間違っているであろう話をまるで真実であるかのように扱うのは、Iago の生来の空虚さを暗示しており、Iago は自身が内面に抱える空虚さを知りながら、それを演技で満たそうとしている」と論じている。しかし同時に、'gnaw my inwards'³ という Iago の言葉に彼の嘘偽りのない感情を感じ取った Nuttall は、「Iago は自分自身に激しい感情を引き起こすことに成功しているが、それは完全に作り物の感情である」とも指摘している。(282)

Nuttall が Iago の感情を作り物であると指摘し、Iago は己の空虚さを演技で満たそうとしていると断じていることは、的を射た指摘に思われる。演劇において独白で話す内容は話し手の本心であるというルールがある以上、Iago が主張する動機をまったくの嘘であると否定することはできない。⁴ しかし一方で、多くの研究者が指摘するように、Iago の感情にはそれが確かに存在していると確信できるような実体を感じられない。何故このような矛盾が起こるのか考えた時、Nuttall が指摘する Iago の演技性は一つの答えを与えてくれる。本稿ではこの Iago の演技性を、Iago による「感情の模倣」として考えてみたい。

2. Iago による感情の模倣

先行研究ではしばしば異人種間結婚に対する嫌悪感が、Iago が Othello を嫌う潜在的な動機の一つであるとみなされている。確かにこの作品では、Othello と Desdemona、あるいは Othello と他の登場人物達との人種的な違いが強調されている。この作品の材原である *Gli Hecatommithi* では Moor(Shakespeare の Othello にあたる主人公)の肌の色について特に言及がないことを考慮すると、白人社会での Othello の異質性や、Desdemona との結婚が異人種間結婚であることを強調したのは Shakespeare 独自のアイデアであったと考えられる。

Moor である Othello の異質性は第一幕から強調されている。Othello と Desdemona の異人種間結婚を軸にストーリーが展開する第一幕で、Shakespeare は次のようなセリフで、黒人男性と白人女性の性的な交わりを動物的な荒々しいイメージで描き出している。

'an old black ram / Is topping your white ewe' (1.1.87-8)

'your daughter covered with a Barbary horse' (1.1.110)

'Your daughter and the Moor are now making the beast with two backs'

(1.1.114-15)

このような Iago のセリフは、Desdemona が Othello と結ばれることを恐れる Brabantio の気持ちを一に刺激する。またここで言語的に表出された異種族混交のイメージは、最終幕で、舞台上に視覚的に提示されることになる。

今西雅章はその著『シェイクスピア劇と図像学』において、Shakespeare 作品の視覚表象を分析し、以下のように述べている。「ときには、登場人物のアクションが、ステージ上で静止した状態になることがある。そのとき中世後期からルネサンスのヨーロッパ各地で見られていた人間が人形のように無言でさまざまな姿勢のまま静止している「活人画(タブロー・ヴィヴァン)」に近い劇表現になる。…シェイクスピアは、舞台図像の視覚的効果を十分に心得ていたとみえ、クライマックスのシーンや最終景などここぞという場面で、このような静止した図像的 (iconic, emblematic) なシーンをさりげなく創出している。」(48)

今西は Shakespeare 劇に見られる図像的なシーンの例として、*King Lear* の最終幕や *Hamlet* の最終幕を紹介しているが、*Othello* の最終幕もまた、効果的なステージ・タブローの一例と考えることができるだろう。初夜の寝床で黒人・Othello が白人・Desdemona の首を絞めて殺害するという、非常に衝撃的かつ絵画的な構図は、Othello の残酷さを強調するとともに、Shakespeare 時代の観客が自覚的あるいは潜在的にもつ異人種間結婚への嫌悪感を大いに刺激したと推測できる。

重要なのは、Othello と Desdemona の結婚を動物的なイメージで描き出す Iago のセリフや、絵画的であるがゆえになおさら衝撃的な最終幕のステージ・タブローがあぶりだすのは、Iago 以外の登場人物と当時の観客の心に潜む異人種混交への嫌悪感であって、Iago 自身の感情ではないということである。一幕一場で Iago が Othello と Desdemona の関係を牡馬と雌馬の交わりに例えた時、一見そのセリフは Iago 自身の異人種間結婚への嫌悪感を示唆しているように思える。しかしこのセリフで Brabantio の怒りと嫌悪をあおる Iago は冷静で、興奮している様子は見られない。Iago のセリフや彼が演出した最終幕の悲劇的なステージ・タブローは、Brabantio や観客の感情を映し出す鏡のようなものである。そして Iago は他人の感情を自分も共有しているように見せかけているにすぎない。

妻 Emilia への嫉妬という動機についても、同じように考えることができる。すでに述べたように、Iago が本当に Emilia と Othello の仲を疑い嫉妬しているとは思えないと主張する研究者は少なくない。確かに、Emilia と Othello が不倫関係にないことは明白であり、嫉妬に苦しむ Othello の姿と比較しても、Iago が同じように嫉妬にとらわれて行動しているとはとても考えられない。Iago の言葉には、Othello ほどの熱が感じられないのである。しかし一方で、Iago が Emilia の不貞を疑い嫉妬していることを暗示的に示す仕掛けが劇中に施されているのも事実である。

例えば次の Emilia のセリフは、Iago が彼女の貞節を疑っていたことを観客に伝えるセリフである。

O fie upon them! Some such squire he was
That turned your wit the seamy side without
And made you to suspect me with the Moor. (4.2.147-9)

一幕三場と二幕一場の独白を除いて、Iago が彼の疑惑にあからさまに言及することはないが、例えば二幕一場には、Emilia の好色さをほのめかす次のようなセリフが見られる。

Come on, come on, you are pictures out of doors,
Bells in your parlours, wild-cats in your kitchens,
Saints in your injuries, devils being offended,
Players in your housewifery, and housewives in ...
Your beds! (2.1. 109-13)

You rise to play, and go to bed to work. (2.1.115)

さらに三幕三場では、Emilia が Desdemona のハンカチを指して言った 'a thing' という単語の意味を Iago はわざと曲解し、Emilia がふしだらで誰とでも寝ると揶揄している。

Emilia. Do not you chide, I have a thing for you –
Iago. You have a thing for me? it is a common thing –
Emilia. Ha? (3.3.305-7)

Shakespeare はこのように Iago と Emilia のセリフを使って Iago の嫉妬心を暗示するだけでなく、劇全体、特に最終幕において、Iago と Othello 及び Emilia と Desdemona のイメージをそれぞれ重ね合わせることで、Iago と Othello が同じ気持ち、すなわち妻への嫉妬心に苦しんでいると観客に暗示する仕掛けを施している。

Shakespeare は二幕一場でまず Emilia と Desdemona のイメージを重ね合わせている。二人は同じように Cassio からのキスを手に受けるが、あくまで礼儀としてのキスであって、性的な意味合いが含まれていないのは明白である。そして三幕三場では、今度は Othello と

Iago のイメージが重ね合わされている。ここで Iago と Othello は並んでひざまずき、Cassio と Desdemona を殺害することを誓っているのである。

さらに三幕三場で、Shakespeare は Othello と Desdemona の会話の直後に Iago と Emilia の同じようなやり取りを続けることでも、二組の夫婦のイメージを重ね合わせようとしている。ここで Othello は、寝取られ男の額には角が生えるという言い伝えを踏まえて、「額が痛い」と Desdemona に訴えている。これはつまり、Desdemona の不貞を暗に非難していることになる。そしてその直後の Iago と Emilia の会話が、先に言及した 'a thing' という言葉をめぐるやり取りであり、今度は Iago が、Emilia の不貞を婉曲的に非難している。

最終幕で Shakespeare はさらに明確に Desdemona と Emilia を重ね合わせている。Emilia が Iago の邪悪な行為を暴露した時、Iago は彼女を「売女！(whore)」と言ってのける。四幕二場以降、Othello も繰り返し Desdemona を「売女(whore あるいは strumpet)」と呼び、五幕二場で Desdemona を殺害した後も「彼女は淫売だった (she was a whore)」と断言している。同じような言葉で夫にののしられるという点でも Emilia と Desdemona のイメージが意図的に重ねあわされていると言えるだろう。さらにフォリオ版では Emilia が柳の歌を歌いながら死んでゆくが、この歌は Othello に殺される前に Desdemona が歌っていた歌でもある。死の直前に同じ歌を歌わせるという趣向でも、Shakespeare は Emilia と Desdemona を重ね合わせて描いていることになる。

このように Shakespeare は、二組の夫婦のイメージを重ね合わせ、Iago と Othello をどちらも妻の不貞を疑う男として並立させているが、それは二人が同じ感情、すなわち妻への嫉妬心を抱いていることを暗示することでもある。E. A. J. Honigmann は、「Othello と Iago はいくつかの点で正反対、あるいは相補的な関係であるが、しかしそれでもエルザベス朝の人々は彼らが不思議なくらい似ていると考えていただろう」と推測しているが(33)、Othello と Iago の共通点の一つが妻への嫉妬心である。

他人の感情を自分も共有しているように見せかけながら、その背後にあるべき熱を感じさせない Iago は、まるで周りの人間の感情を映し出す鏡のような存在である。このように考えると Iago が話す動機はすべて、彼の周りの人間の感情を鏡のように映し出し、模倣しているにすぎないと気が付く。妻への嫉妬は Othello の感情であり、Desdemona への横恋慕は Roderigo の感情である。昇進できなかったことへの鬱屈は、降格された Cassio の嘆きと重なる。さらに、Desdemona が異人種である Othello と結婚することに対する嫌悪感は、Desdemona の父 Brabantio だけでなく、Shakespeare 時代の観客も共有する感情である。Iago はこのような自分以外の人物の感情を自分の感情であるかのように装っていると考えられる。劇作家の立場から考えると、役の感情を演じる役者と Iago を重ね合わせるメタシアター

的な趣向でもある。

しかし、真にその感情にとらわれている他の登場人物達と比べると、Iago の感情には彼らほどの熱量がないことは明白である。破滅に追い込まれるほどの *Othello* の激しい嫉妬心と比べると、Iago の嫉妬は言葉も態度も軽い。あるいは、Desdemona に恋焦がれる Roderigo が何とか Desdemona に近づこうとするそばで、同じく Desdemona に横恋慕しているはずの Iago が積極的に Desdemona にアプローチしていないとなると、観客が Iago の気持ちを疑いたくなるのも無理はない。このように、周りの登場人物達の感情を模倣している Iago は、真にその感情にとらわれている彼らと比較され、彼らと同じ熱意が Iago の内面には見られないと見抜かれる。これが、Iago の感情は実体を持たない、その内面は空虚であると指摘される理由ではないだろうか。

*本稿は、2015 年京都大学に提出した博士論文 *The Tradition of the Vice and Shakespeare's Villains in His Tragedies* の第三章に大幅に加筆・修正を施したものである。博士論文でも、Iago は鏡のように他の登場人物達の感情を映し出していると指摘したが、本稿ではそれをさらに発展させて議論している。

註

- 1 *Othello* からの引用はすべて、Arden Shakespeare (ed. E. A. J. Honigmann) による。
- 2 Peter Holland も、Iago の Vice 的な側面と心理的な性格造形について、観客との関係性から Mooney と同様の分析を行っている。(130)
- 3 'For that I do suspect the lusty Moor/ Hath leaped into my seat, the thought whereof/ Doth like a poisonous mineral gnaw my inwards ...' (2.1.293)
- 4 この点について Spivack は、「Shakespeare は独白の最も基本的な機能をゆがめている」と考えている。(25) 同じく Barbara Everett も、Iago の独白を「奇妙な見せかけの独白」とであると断じている。(192)

参考文献

- Auden, W. H. *The Dyer's Hand and Other Essays*. New York: Random House, 1948. Print. Everett, Barbara. "Inside *Othello*." *Shakespeare Survey* 53 (2000): 184-195. Print.
- Everett, Barbara. "Inside *Othello*," *Shakespeare Survey* 53(2000):184-195. Print
- Hawkes, Terence, ed. *Coleridge's Writings on Shakespeare*. New York: Capricorn Books, 1959. Print.
- Holland, Peter. "The Resources of Characterization in *Othello*." *Shakespeare Survey* 41 (1989): 119-132. Print.

Mooney, Michael E. *Shakespeare's Dramatic Transactions*. Durham: Duke University Press, 1990. Print.

Neill, Michael. Introduction. *Othello, the Moor of Venice*. Ed. Neill. Oxford: Oxford University Press, 2006.

Oxford World's Classics. Print.

Nuttall, A.D. *Shakespeare the Thinker*. New Haven: London: Yale University Press, 2007. Print.

Shakespeare, William. *Othello*. Ed. E. A. J. Honigmann. Croatia: The Arden Shakespeare, 1997. Print.

Spivack, Bernard. *Shakespeare and the Allegory of Evil*. New York : Columbia University Press, 1958. Print.

Stoll, Elmer Edgar. *Shakespeare and Other Masters*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1940.

Print.

今西雅章 『シェイクスピア劇と図像学 舞台構図・場面構成・言語表象の視点から』彩流社 2008年